

高架下の天使たち

添見奏音

目次

一	出会い	6
二	心の闇	35
三	過去	74
四	再会	107
五	新しい生活	135
六	試練	170
七	再出発	197
八	それぞれの幸せ	223
九	転機	262
十	そして	311
	あとがき	332

一 出会い

とある町のJRローカル線。

昼間でも薄暗い、駅の高架下通路。

駅の表と裏とを行き来するための通路だが、足早に行き交う通行人の他に、壁際に座って弾き語りをする者、ラジカセの音楽に合わせて仲間とダンスの練習をする者、ただ目的もなく集まってくる者たち――。

さまざまな人たちが毎日ここにやって来ては、それぞれの時間を過ごす場所でもあった。

通勤ラッシュの時間帯も過ぎ、人の歩みが緩やかになってきた頃。

通路の一角で群れる、五、六人の若い男たちの姿があった。皆、二十歳前後に見える。昨夜も同じ場所で見かけた顔だ。家にも帰らず、ここで一夜を明かしたのだろう。

「見たかよ、あん時のヒロシのツラ」

「マジだっせえ」

「でさ、トオルのやつがさ……」

彼らは地面に座って通路の一角を陣取り、大声で他愛もない話をしながら、それぞれに思い

思いの食事をしている。通路を曲がった角のコンビニで買った物のようだ。

通行人は見向きもせず、若者たちの傍を通り過ぎていく。この通路では日常茶飯事の光景なのだろう。

彼らの一人、少し伸ばした黒髪にニット帽をかぶった青年だけが、他の仲間たちとはどこか異質な存在に見えた。すらりとした華奢な長身と、色白で繊細な顔立ちには、思わず手を貸してしまいたくなるような、頼りなげな印象があった。

青年は仲間たちの会話に加わるでもなく、紙パックの牛乳にさしたストローを口にくわえたまま、前を歩いている二人連れの小学生を虚ろな目で追っていた。

小学生の一人が、新品のゲーム機をもう一人に自慢そうに見せびらかしている。

「すごいじゃん。買ってもらったのか、それ」

「いいだろ、限定モデルだぜ」

「オレにもかしてくれよ」

「イヤだよ、お前すぐこわすだろ」

小学生の会話を聞きながら、青年の脳裏に別の声が響いていた。

——情けをかけてやったのに。

「拓深、なに見てんだよ」

仲間の一人に声をかけられて、はっと我に返る。

「別に……」

「今夜はバイト入ってるから忘れずに来いよ。お前、シフトとかちゃんと見てねえだろ」

「今日は行かねえ、気分やらねえし」

無気力な声で答える青年。

「お前、もつと真面目にやれよ。俺のおやじの店だから、クビにされずに済んでんだぞ。自分で仕事探せるのか？」

「うるせえ！」

青年の怒鳴り声に驚いた別の仲間が、二人の話に割り込み、

「もう行こうぜ。拓深は今日も、虫の居所が超最悪」

そして仲間たちはゲラゲラと笑いながら、その場から立ち去っていった。

一人残された、拓深という青年。

「……うるせえんだよ、人を見下しやがって。お前らなんか、別にあてにしてねえよ」

こみ上げてくる苛立ちに、握りしめられた牛乳パックから中身がこぼれ出す。

拓深の心を苛立たせているものは、一体何なのか。仲間とも無防備に交わり合おうとはしない。

いつしか拓深はぼんやりと、遠い日の記憶の世界に入り込んでいった。

まつもりたくみ
松森拓深は、父と母との三人家族だった。

両親は恋愛結婚だったが、人付き合いが苦手で感情表現の下手な父親は、拓深が生まれたあとも「人並みな」父親にはなれなかった。

仕事においても、日々の生活においても、うまくいかない事があると、母親や拓深に八つ当たりし、暴力を振るうようになっていた。二人の体には痣が絶えなかった。

小学生になった拓深は、自分から積極的に人と交わろうとしない、内向的な性格の少年になっていた。

そんな拓深に、友達ができた。

なかぞのこうき

中園晃紀。いわゆる優等生タイプで、理屈っぽくものを話す子供らしくないところもあったが、拓深とはなぜか気が合った。

授業が終われば、日が暮れるまで校庭で二人で遊んだ。拓深の苦手な科目を、晃紀が特訓してくれたこともあった。

晃紀のお陰で、拓深は少しずつ笑顔を見せられるようになっていった。

家に帰れば父親の暴力が待っている。母親は容赦のない父親の暴力に疲れ果て、拓深にかまう余裕さえなくなっていた。

拓深にとって、学校だけが心の安らぐ場所だった。

四年生の二学期が始まったある日。

夏休みの工作の課題として、晃紀が作ったステンドグラスのペン立てが表彰され、教室の後

ろにあるロッカーの上に展示されることになった。

何でも器用にこなす晃紀だったが、なかでも工作は得意で、父親が嬉しさのあまり教室まで作品を見にやって来たほどだった。晃紀も鼻が高かった。

数日後の休憩時間、いつものようにロッカーの前で拓深と晃紀が話をしていた時だった。話に熱中するあまり、つい振り上げた拓深の手が晃紀の作品を弾き飛ばし、ペン立ては床の上に叩きつけられ、激しい音をたてて砕けてしまった。

一瞬静まり返る教室。拓深は青ざめた顔で慌ててしゃがみ込んだ。

「ごめん。どうしよう……、本当にごめん」

破片をひとつひとつ拾い集めながら、今にも泣き出しそうな顔で謝る拓深。

晃紀はその姿をじっと見下ろしていたが、

「もういいよ。壊れてしまったものは、しかたないじゃん」

「でも俺、とんでもないことを……。本当に、ごめんなさい」

「拓深、もうやめなつて。君がケガするよ」

自分を責めることもせず笑って許してくれた晃紀の優しさに、拓深は心底救われる思いがした。

——いつか晃紀が困っている時は、自分が助けてあげたい。

拓深は心からそう思っていた。

だが、次の日から晃紀の態度は一変した。